

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

施設名	太陽の子めぐりさわ保育園
施設所在地	東京都世田谷区千歳台4-14-1
法人名	HITOWAキッズライフ株式会社

1. 活動のテーマ

<テーマ>

からだ いっしょに走りたい！

<テーマの設定理由>

(テーマに関する子どもの興味関心、園の特色など)

昨年度からからだをテーマにすくわくプログラムの探求活動をスタートした。子どもたちの姿から感覚統合の視点で繰り返し環境を整え保育を行い、「のぼりたい(手・足)」をテーマに1年間実践した子どもたち。進級し部屋に身体を動かせるスペースに昨年活動した(マウントブロック)を用意していたが、机の周りや部屋を友だちと誘い合って走り回る姿が多く見られるようになった。

2. 活動スケジュール

6月から7月：去年購入したマウントブロックを使って身体を大きく動かせられるように設置する。

7月30日：作業療法士定金先生に室内の環境や子どもの姿を見てもらう。

→一緒に走りたい、スピードを感じたいと思っている子どもがいる一方で、そうではない子どももいる。どちらの子どもたちの思いや欲求を保証する環境を作っていくようにアドバイスをいただいた。

9月11日：定金先生のオンライン研修受講。重力に抗うことで、身体の軸が育つことを学ぶ。

10月：両方の欲求を持っている子どもたちのため、どちらも満足できるように、リバースステップとマットを購入しマウントブロックとバランスボックスを組み合わせる。また、スピードやGの感覚を取り込むため購入した回転いすも設置。

11月8日：保護者共有会→園児保護者をお招きし、定金先生も交え、今年度設定した環境の中で保護者にも子どもたちの遊びを見学いただく。（当日は5名程度の保護者が参加）

2月：定金先生による振り返り

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

（活動のためにどのような環境を設定したか、準備した素材や道具）

マウントブロックのリバースステップ（縄ばしご）購入

マット購入

回転いす二台購入

バランスボックス

株式会社ここんの定金先生の巡回講師料

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

【取り組み前】①昨年のすくわくテーマ「のぼりたい」で育った子どもたちにすくわくプログラムで購入したマウントブロックを設置して子どもの様子を観察する。

【いっしょにはしりたい】②作業療法士の定金先生と今の子どもたちを観察。走り回る一方で床にゴロゴロしたり指を吸う子どもたちが一定数いること、身体の軸について着目し、筋緊張が低いと推察。重力に抗う力が弱い、手足で支える力が弱い、自分の身体の力がうまく使えていないことがわかり、身体の軸をテーマにオンライン研修をお願いする。

【環境の模索1】③子どもたちが興味を持った消防士さんになって手押し車遊びを取り入れた。また、マウントブロックはサーキットという連続性のある遊びを子どもたちと考えながら組み合わせスタートとゴールを決め一方向に進むというルールを決め社会性の発達を促す遊びとして整えた。

【学び・気づき】④「身体の軸の育ちを支える」という内容で研修を行っていただく。今の子どもたちの身体の変化を学び「この世に生まれて最初に挑むことは重力に抗うこと。重力のあるこの世界と仲良くなるのが大切」=身体の軸（頭蓋骨から背骨を安定させる軸）と学ぶ。

【環境を模索2】⑤環境に手押し車や昨年の1歳児クラスで使用したものより高さも大きさも大きく、あえて表面を不安定にしたバランスボックスを作り重さも加えた。他に回転いすやリバーステップ、マットを増やし、押し跳びジャンプをしたり、ごっこ遊びを楽しみながら筋力が育つよう環境を整えた。

【探求の中の発見】⑥子どもたちが自ら、身体感覚を入れたい遊びを選びつつ、友だちと物語のイメージを共有出来るような活動の工夫を保育者と子どもたちと一緒に遊びながら模索したところ、友だちを遊びで誘う姿が見られた。

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

(活動の内容、活動中見られた子どもの姿、保育者との関わり等)

【取り組み前】①マウントブロックの周りを子どもたちが誘い合って走り回ったり、「あー」と大きな声を重ねたり、机をたたいて楽しむ姿が見られた。

【いっしょにはしりたい】②定金先生と今の子どもたちの姿を観察。一緒に走りたい子どもたちの傍でゴロゴロと床に寝て指を吸っている子どもたちの姿も見えてきた。感覚のニーズを満たしつつ、ゆるやかな社会性の発達を教えていただく。

【環境を模索する1】③遊び方の簡単なルールや順番を子どもたち自身が決めるようになり、遊びを保育者に促されなくても「じゅんばんこだよ」「一人ずつだよ」と言葉を掛け合いながら自分たちで遊ぶ環境(サーキット)づくりに取り組み始めた。

【学び・気づき】④身体の軸を育てる研修を受け、全スタッフが子どもたちの立ち姿や動きを丁寧に観察し、共通言語として身体の軸について筋緊張について子どもたちの姿を身体の軸の視点を持って話す会話ができた。

【環境を模索する2】⑤定金先生に教えていただいた手押し車遊びは興味を持った消防士が火を消しに行く設定にしたことで、火元まで床に手をついての移動を保育者と一緒に行き、サーキット作りでは友だちどうして「これ、ここにしよう!」「ジャンプしたい!」「楽しそうだね!」など会話をする場面が増えた。リバーステップ(縄梯子)を購入する足で縄の感覚を楽しみながら周りの友だちや保育者と関わりながらそれぞれ感覚を楽しむ姿が見られた。子どもたちが走りたい欲求の中にスピードを感じたいのではという問いに回転いすを設置したところ、Gを感じる遊びに感覚の鈍い子どもたちが覚醒する姿が見られた。

【探求の中の発見】⑥育ちの中で何かになりたい欲求もあり、リバーステップの下にワニの絵を描き、冒険ごっこの設定や興味を持った消防士からレスキュー隊に変化し、マウントブロックやサーキットを組み合わせで救助ごっこ遊びなど、なりきって遊び友だちと一緒に物語の世界に入り始めた。子どもたちがイメージ共有しながら身体を動かす遊びの環境探求を続けていきたい。



5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

自分の身体の感覚がつかめず、どこに力を入れたらいいかわからず走っている子どもたちの姿があった。

身体のどこに力を入れたらいいかコツをつかみ始めた子どもたちは、自分たちで遊び方のバリエーションを増やしたことで、一緒に走るだけではなく自発的に友だちと遊びながら身体を動かすようになった。ゴロゴロして休息していた子どもは自分でカームダウン出来る場所を探せるようになったことで、指を吸っていた子どもたちは減少した。保護者には一緒に遊びながら定金先生も交えて子どもたちの変化の共有を行った。走りたい、ゴロゴロしたい、どちらのタイプの子どもたちも物語を介することで一緒に身体を動かす遊びに取り組む姿が見られた。

身体の軸が育ち、自分の身体を自分のものと感じられ、身体を使って思い通りに動かせることが増えてくる中で、少し難しいことに挑戦する勇気やごっこ遊びを発展させ、友だちと一緒にさまざまな物語を生み出し、その先の喜びを十分に味わうことで、生きる自信につなげてほしい。保育者はその子どもたちの世界を育んでいくことが役目と実感している。